様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　6 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520773
研究課題名（和文）　人物造形品集成と分析にもとづく弥生時代の儀礼と社会組織に対する基礎的研究
研究課題名（英文）　The basic study about the ritual and social organization of the society at the Yayoi period based on the analysis and corpus of the date of the figurines.
研究代表者
設楽博己（SHITARA HIROMI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70206093

研究成果の概要（和文）：3 年間にわたり表記の内容の研究を進めた結果、274 件の該当資料を集成することができた。とりまとめとして、①資料のデータにつき、文字情報をエクセルに入力した。②各資料にかかわる文献もエクセルに入力した。③資料の一部は実測作業を行い、その他の資料については実測図のコピーをスキャンして入力し、あわせて縮尺を統一して一枚の図面に仕上げたものを 36 枚製作した。これらの集成結果を踏まえ、中国・朝鮮半島の当該期の資料や縄文時代の土偶と比較しつつ、性格に考察を加え、弥生時代の儀礼の特質や社会組織のありようを推測した。

研究成果の概要（英文）：I have been able to capture 274 dates about the figurines at the Yayoi period through the work during 3 years. I putted together these dates, I have attained three important results as followers.　①These dates were inputted into computer. ②The dates of the reference books were inputted too. ③36 figures consisted by these materials were drawn and edited. I speculated about the characteristic of the ritual and the social organization on the Yayoi society based on this work and made the comparative analysis with thinking about the Dogu figurines at the Jomon period and some materials at China and Coria using same time at the Yayoi period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：弥生時代・人物造形品・男女像・鳥の扮装・縄文土偶・僻邪

１．研究開始当初の背景

弥生時代の人物造形品は、西日本の木偶をはじめとして、土偶や石偶、東日本では土偶のほか土偶形容器、顔面付土器など数多くが知られている。最近では、木製仮面が出土して注目されている。日本先史・原史時代の人物

造形品といえば、縄文時代の土偶と古墳時代の人物埴輪があり、それぞれ研究が進展しており論文の数も多い。

しかし、その間に挟まれた弥生時代の人物造形品に関する研究は、あまり活発におこなわれているとはいえない。種類こそ多いものの、あまり注目されない。これは、弥生文化の人物造形品をもっともよく特徴づける木偶や石偶、西日本の弥生土偶などについては、体系的に論じるには素材不足などの面から敬遠されていることもあるが、東日本の弥生土偶は縄文時代の名残りとしての評価が与えられたり、あまり面白みのない研究として集成作業すら行われていないことがていることに起因している。

しかし、以下に一例を示すように、数少ないながらも重要な研究がおこなわれている。研究代表者も、いくつか論文を発表してきた。

木偶は滋賀県域を中心に分布しており、濱修が集成して考察を加えている〔濱修 1993「弥生時代の木偶と祭祀－中主町湯ノ部遺跡出土木偶から－」『紀要』第 6 号、滋賀県文化財保護協会〕。金関恕は、木偶を鳥形木製品とともに分析し、それを 3 世紀の『魏志韓伝』の記述、あるいは朝鮮半島から出土した人物を描いた青銅小板や民俗例であるチャンスン（木偶）・ソッテ（鳥形木製品）と比較しながら、その役割を稲作儀礼と推定した〔金関恕 1986「呪術と祭り」『岩波講座日本考古学 4』岩波書店〕。

土偶については、佐藤嘉広が東北地方の弥生時代の土偶を集成して分析し、縄文土偶から弥生土偶への変質を論じた〔佐藤嘉広 1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第 81 巻第 2 号〕。

土偶形容器と顔面付土器は、弥生時代の前半に南東北地方から中部地方にかけて、盛行した。この地方の初期弥生文化を特徴づけているのが、再葬墓である。いったん遺体を骨にした後に再埋葬する葬法であるが、その蔵骨器に大型の壺形土器がさかんに用いられる。その一種として壺の口縁部に顔面をつけたものが顔面付土器であり、中空の土偶を変化させたものが土偶形容器である。いずれも中から人骨が出土した例があり、再葬の蔵骨器であるのは明らかである。顔面付土器は、土偶形容器とともに扱って再葬墓における役割を論じた石川日出志の論文、土偶形容器については、縄文晩期終末に位置づけて墓との関係をはじめて論じ、縄文時代の土偶が祖先祭祀とのかかわりにおいて墓制に関与するようになった江坂輝弥と野口義麿の研究〔江坂輝弥・野口義麿 1974『土偶芸術と信仰　古代史発掘３』講談社〕やはじめての集成的研究である宮下健司の研究などが主な研究論文である。

人物造形品とかかわる絵画の研究分野においては、都出比呂志や春成秀爾が銅鐸や土器に描かれた人物絵画を分析し、弥生時代の男女別分業の問題や鳥に扮した呪術師の役割に論考を加えている〔都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店、春成秀爾 1987「銅鐸の祭り」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 12 集〕。

奈良県纏向遺跡で出土した木製仮面は、中国の方相氏という呪術師の用いていた仮面が影響を与えて出現したという注目すべき見解がある。

本研究の代表者が弥生時代の人物造形品に関心を寄せたのは、再葬墓の研究を通じてであった。再葬墓に納められた土偶形容器は、一対で出土する場合がある。その特徴を型式学的に分析し、男女像であることを論証した。そして、縄文時代の狩猟採集社会と弥生時代の農耕社会における男女別分業と協業のあり方を、生業組織と墓における男女並葬の問

題から追究し、男女一対の偶像が弥生時代に誕生した必然性を説いた〔設楽博己 2007「弥生時代の男女像」『考古学雑誌』第 91 巻第 2 号〕。この研究は、弥生時代の人物造形品を通して、弥生時代の男女の社会的関係性を探ったものである。また、弥生時代のイレズミの絵画の研究から、縄文時代にイレズミの習俗がさかのぼる可能性を論じ〔設楽博己 1999「黥面土偶から黥面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 80 集〕、東日本にみられる弥生前期の土偶の頭部表現が、西日本の弥生前期に出現した頭頂部に装飾のある土偶の影響の可能性を考え、それが鳥装表現である可能性を指摘した〔設楽博己 1999「土偶の末裔」『新弥生紀行』朝日新聞社〕。これは、縄文時代から弥生時代へと、儀礼がどのように継承したり質的な変化を遂げているのか、明らかにしようとしたものである。

近年、岡山県田益田中遺跡でイレズミを施した弥生前期の人頭像が出土し、さらに岡山県上原遺跡で頭頂部に隆起の装飾がある弥生前期の人頭形土製品が出土し、代表者の仮説を検証するための重要な実例が数を増してきた。この研究は、具体的な分析によって縄文土偶との違いを明らかにしようしたものであるが、こうした研究は希薄であり、縄文時代から弥生時代への移行の問題は未解決の部分が多い。

縄文時代から弥生時代へ移り変わるにあたって、土偶などの呪的形象がどのように性格を維持したり変化させているのか、その社会的背景に迫る研究が必要である。そこで注目されるのが、弥生時代の人物造形品は弥生文化の範囲にまんべんなく広がるが、地域によって種類の違いが著しい点である。したがって、それらを集成して分布状況を把握したのち、それぞれの人物造形品に対して、その起源や縄文文化古墳文化のそれらとの違いを明らかにしていかなくてはならない。そのための資料集成が基本的作業として必要であり、それに基づく考察と一種類の遺物だけではなく、それぞれの遺物の相互関係を踏まえながら考察することが必要とされていたのが、研究当初の状況であった。

２．研究の目的

弥生時代の人物造形品をできる限り集成し、弥生時代の絵画や朝鮮半島・中国の資料などをまじえながら相互に比較・検討し、それぞれの系統関係や役割を研究する。それを基礎として、弥生時代の埋葬人骨の男女のあり方などを比較検討材料にしつつ、弥生時代の儀礼と社会組織が縄文時代からどのように受け継がれ、あるいは変化しながら形成されていったのか、検討を加えるのが本研究の目的である。

代表者は、2000 年度～2002 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「日本原始絵画の図像学的研究」を行ない、成果を公表してきた〔設楽博己編 2006『原始絵画の研究　論考編』六一書房〕。本研究は、それを踏まえて弥生時代の儀礼の研究をさらに発展させる目的をもっている。縄文時代の土偶については、悉皆的な集成作業の成果が公開されており〔八重樫純樹編『土偶とその情報』国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集、「土偶とその情報」研究会編 1997～2000『土偶研究の地平 1～4』勉誠社など〕、それにもとづいた製作技法の検討などによる様々な仮説から、土偶の役割の議論が進行している。しかし、弥生時代の人物造形品は、個別の研究は多いが、資料の悉皆的な集成と統一的な観察はなされていない。また、弥生文化の形成に直接的影響を与えた朝鮮半島青銅器文化の人物造形品も集成作業は進んでいない。弥生時代の人物造形品についての統一的基

準にもとづく悉皆的情報集成と実測図の公表は、過去に例がなく、弥生時代の儀礼や社会組織の研究の基礎としてきわめて大きな意義がある。

研究面においても問題は山積している。たとえば、関東地方の弥生後期の顔面付土器は、同地方の弥生時代初期の顔面付土器が引き継がれたものといった解釈ですまされているが、西日本の人頭土製品の影響がたぶんにうかがわれると同時に、古墳時代の人物埴輪に継承される特徴を有していることが予測できる。このことは、それぞれの人物造形品に考察を加えると同時に、時代や地域のしばりを取り払い、相互比較するといった総合的な考察が必要であることを物語っており、それは未開拓の分野である。本研究ではこれらの情報と正確な実測図を悉皆的に集成して公開し、学界の基礎財産とする。

集成にもとづきこれら人物造形品の考古学的分析をおこない、縄文時代の土偶、弥生時代の青銅器や土器に描かれた絵画、古墳時代の人物埴輪、さらに朝鮮半島や中国の人物造形品などと比較することで、弥生時代の人物造形品の系譜・系統関係、役割、社会的な意義に総合的な考察を加えることを目的とする。

３．研究の方法

本研究の内容は、①資料集成・公表と、②資料に対する検討の２部門からなる。

収集する資料は、弥生時代の a）木偶、b）土偶、ｃ）人頭形土製品、ｄ）土偶形容器、ｅ）顔面付土器、ｆ）朝鮮半島青銅器時代の人物造形品である。資料集成には最初の２年間をあてた。資料収集に際しては、A）出土状況や製作技法など遺物に関する諸属性を把握する、B）できる限り資料を実見し、正確な実測図を作成する、という方針のもとに、悉皆的に集成した。これまで個別のテーマでそれぞれ論じられてきた弥生時代の人物造形品を、統一的な視点から集成し、研究の基礎とした。資料の情報収集は、駒澤大学や国立歴史民俗博物館の学術雑誌や報告書、図録など各種書籍類を調査して行ない、一覧表と実測図からなるデータベースを作成した。一覧表はエクセルで入力し、実測図はイラストレーターで作成した。実測図は応募者がすでに作成したものに加え、各種書籍類からスキャニングしたが、正確な実測図のないものについては、現地に出向いて実測をおこなった。データの収集と実測作業は、大学院生などの助力により成し遂げた。

平成 22 年度には、上述のａ・ｂ・ｃの収集を行なった。収集資料のデータを踏まえて、この年度では、a）木偶の形成過程、出土状況などからみた役割についての考察、ｂ）縄文時代からの土偶の変化と弥生時代に継続する意味についての検討、ｃ）人頭形土製品の分類、分布と製作技法など特徴の把握を行なった。

平成 23 年度はｄ・ｅと朝鮮半島青銅器時代の人物造形品の集成を行なう予定であったが、朝鮮半島の資料はわずかに収集したにとどまる。土偶形容器は、すでに〔設楽博己 1998「下境沢遺跡出土の黥面付土器」『下境沢遺跡』長野県塩尻市教育委員会〕で集成し、〔設楽 2007 前掲論文〕作成時に実測を進めており、その後明らかになった資料を収集した。ｅ）顔面付土器は、東日本のものについては、〔荒巻実・設楽博己 1985「有髯土偶小考」『考古学雑誌』第 71 巻第 1 号〕で集成しているので、その後出土した資料のデータを収集した。

そしてｄ）土偶から土偶形容器や顔面付土器への変遷、土偶形容器の形成過程と製作技法などからの顔面付土器との比較、ｅ）顔面付土器の分類と属性の把握などの研究を行

なった。

平成 24 年度は集成した資料の一覧表と実測図を編集し、集成データと個別資料群のこれまでの検討結果を踏まえて、資料群相互の、あるいは縄文時代や大陸の遺物、弥生時代の青銅器や絵画などとの比較検討から、弥生時代人物造形品の年代と系譜・系統性、役割と社会的意義を明らかにし、弥生時代の合葬あるいは並葬人骨の性別の検討結果を合わせ、弥生時代の儀礼の研究を行なった。

４．研究成果

資料収集の結果、274 件の弥生時代人物造形品のデータを収集することができた。そのうちの 50 点ほどは自ら実測して、正確な図面を作成することができた。2 であげた個々の資料については、それぞれで新しい問題点を指摘することができた。その結果は以下のとおりである。

顔面付土器を集成した結果、そこに二つの大きなグループがあることが指摘できた。一つは顔が正面を向くタイプであり、もう一つは顔が斜め上を向くタイプである。前者の多くは弥生時代前半の再葬墓の蔵骨器である。土偶形容器もそこに含まれる。後者は西日本にかたよっている。

この違いは、縄文文化の系譜と新たに生じたある傾向性にもとづくものである。縄文文化の系譜とは、前者にみられる正面を向いた表現であり、縄文時代の土偶の多くがそうした表現をとることに起因したものと考えた。その一方、斜め上を向いているのは、鳥が飛ぶ上空を見ている表現であると考えた。鳥は弥生時代に信仰の対象になることが指摘されている。それは稲の魂を運ぶ乗り物だったからという推測にもとづいている。銅鐸や土器に農耕儀礼の一環として鳥がさかんに描かれていることからするとその推測は正しい。したがって、斜め上を向く人物造形品が弥生前期にさかのぼり、西日本に多く分布し、そのなかに西川津遺跡のような鳥の羽冠を表現した隆起をもつものもあることは、西日本で始まった稲作とそれにもとづく儀礼の道具としてこうした表現の人物造形品が生まれたことを物語っていると考えた。

東日本でも泉坂下遺跡のように、茨城県の再葬墓に伴う顔面付土器が斜め上を向いているのは、西日本からの影響が加わった結果であると推測した。泉坂下例の顔面表現が、角江遺跡例にもっとも近いのもそのことを傍証している。これは、弥生時代の人物造形品に、縄文文化の伝統的形象と西日本に端を発する縄文文化と異なる文化の影響力によって二元的な人物造形品の製作がなされ、それが一部で交流するという実相を描くことができた。

顔面付土器について、３世紀すなわち弥生後期後半の群馬県有馬遺跡の例を取り上げ、そこに中国の思想の流入が認められることを推定した。この例は、従来弥生時代前半の顔面付土器の系譜として理解されてきた。しかし、顔面に認められる誇張表現が５～6 世紀の盾持人埴輪の表現と一致する。そして、盾持人埴輪は方相氏という中国の儀礼制度の影響によって成立したという有力な意見があることから、方相氏の日本列島への思想的な影響は３世紀にさかのぼることを推察した。

纏向遺跡で出土した木製仮面は戈と盾とともに出土しており、方相氏の持ち物と一致している。方相氏は仮面をかぶって儀礼をおこなうことからもこれが方相氏の影響を受けて登場したことが考えられるのであり、纏向遺跡が３世紀に形成された遺跡であることを考えれば、この時期日本列島の広い範囲に中国の影響が及んでいることを推定することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
① 設楽博己 2010「弥生絵画と方相氏」『史学雑誌』119－9,1525－1527 頁（査読無）
② 設楽博己 2011「入墨からみた邪馬台国の位置」『文化交流研究』24,1－７頁,東京大学文学部（査読無）
③ 設楽博己 2011「盾持人埴輪の遡源」『東国の地域考古学』123－134 頁,六一書房（査読無）
④ 設楽博己 2011「日本における入墨の起源と謎」『弥生人の姿―倭人伝の人々－』32－35 頁,出雲弥生の森博物館（査読無）
⑤ 設楽博己 2013「絵画から解く先史の思考」『季刊考古学』122, 36－39 頁,雄山閣（査読無）
⑥ 設楽博己 2013「弥生時代の人物デザイン」『考古学研究会東京例会シンポジウム人物デザインの考古学』15－17 頁,考古学研究会東京例会（査読無）

〔学会発表〕（計１件）
① 設楽博己 2013 年 3 月 16 日「弥生時代の人物デザイン」『考古学研究会東京例会シンポジウム身体としての土器』國學院大學

〔図書〕（計１件）
① 武末純一・森岡秀人・設楽博己 2011『列島の考古学３　弥生時代』河出書房新社、120 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
設楽博己（SHITARA HIROMI）
東京大学・大学院人文社会系・教授
研究者番号：70206093

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：